

種別	指定	名称・所在・時代・指定日	解 説	写 真
有形文化財	建造物	観菩提寺本堂 かんぼだいじほんどう	観菩提寺は東大寺別当職にあった実忠が開基し、東大寺で正月に行われる修正会が当寺でも行われたことから、正月堂とも称せられています。本堂は桁行三間、梁間三間、一重、入母屋造、檜皮葺で、正面7.9m、側面7.9mの規模を測ります。外部は総朱塗りで、向拝は明治16年(1883)に付加したものです。柱は全て円柱で、腰には四方に濡縁を巡らし、堂前面各間に部(くしみ)格子を設けています。中世後期の伽藍図である『観菩提寺古絵図』には、本堂・楼門のほか多数の堂宇が描かれていることから、他の多くの伽藍が織田信長の伊賀攻めに際して被災したのに対して、本堂は運良く被災を免れた貴重な文化財であると言えます。	
		島ヶ原1349 室町 明治40年(1907)5月27日		
有形文化財	建造物	観菩提寺楼門 かんぼだいじろうもん	楼門は桁行三間、梁行二間、屋根は入母屋造、檜皮葺で、柱は総丸柱であり、勾配緩かで軒端には著しい反りがある、荘重な造りとなっています。上層三間二面の柱間は各面各間を開け放ち、腰に厚い廻縁を巡らし、高欄を施しています。下層三間二面の中央間を入口とし、両脇間を開け放ち、外側左右に金剛力士像2軀を配し、内側左右に広目天、多門天を安置し、内側は鏡天井とし、両側面各二間は壁を塗っています。室町期楼門建築の優作とされ、建築手法には和様と唐様が混在しています。本堂よりわずかにさかのぼる時期の作とされます。	
		島ヶ原1349 室町 明治40年(1907)5月27日		
有形文化財	建造物	大村神社宝殿 附 棟札3枚 おおむらじんじゃほうでん つけたりむなふだ3まい	宝殿は元の大村神社主殿である鹿島社が現在に伝えられたものです。一間社、単層入母屋造、妻入り、屋根は檜皮葺です。木組は簡素ながら形状はよく整い、臺段は向拝に竜、正面に牡丹・唐獅子、他は紅葉に鹿が彫られ優雅な彩色が施されています。天正9年(1581)、天正伊賀の乱の兵火によって焼かれたが、同15年(1587)に再建され、豪放華麗な桃山様式の建築美が後世に残されました。また、正保4年(1647)・元禄11年(1698)・安永8年(1779)の記がある棟札3枚が残され、合わせて国指定とされています。	
		阿保1555 桃山 大正9年(1920)4月15日		
有形文化財	建造物	高倉神社本殿・境内社八幡社本殿 ・境内社春日社本殿 附棟札6枚 たかくらじんじゃほんでん けいだいしゃはちまんしゃほんでん けいだいしゃかすがしゃほんでん つけたりむなふだ6まい	本殿は一間社流造、檜皮葺、浜縁付です。並立する3殿の中央に建ち、斜面を這い上がる捻廊を前面に設けた社殿です。八幡社本殿も本社本殿同様に、一間社流造、檜皮葺、浜縁付ですが、規模はやや小さくなっています。春日社本殿は一間社、隅木入春日造です。用材はヒノキで、檜皮葺、三方に擬宝珠を施した高欄をめぐる縁を付し、本殿の左に建っています。3棟とも極彩色が施され、彫刻の手法等に桃山期の特色がよく表れています。棟札に「天正二年(1574)十一月二日 奉造立春日社仁木殿長政為御本願造立……」とあることも、建築様式の時代的な特徴と合致しています。	
		西高倉1046 桃山 大正15年(1926)4月19日		

有形文化財	建造物	猪田神社本殿 附 棟札6枚 いだじんじゃほんでん つけたりむなふだ6まい	猪田一郷の惣社とされ、社蔵棟札によれば、天正18年(1590)から江戸期をとおして住吉神社と称しましたが、明治41年(1908)に周辺の諸社を合祀した際に、猪田神社と称するようになったようです。一間社流造、檜皮葺で、棟のみ瓦葺が見られます。正面は唐戸、他の三面は板壁で、極彩色の丹塗りが施されています。棟札によると大永7年(1527)に再建された後、天正18年(1590)に大修理されたことがわかりますが、建物の構造形式にも室町期末のものが残っています。	
		猪田5139 室町 昭和14年(1939)10月25日		
有形文化財	建造物	射手神社十三重塔 (南方塔) いでじんじゃじゅうさんじゅうのとう (なんぼうとう)	射手神社の鳥居の左右に立つ二基の十三重塔のうち南方のもので、現存高は約5.2mを測ります。刻銘はありませんが、様式上南北朝期の造立と考えられます。花崗岩製で、二重の台石上に立ち、相輪の一部を欠きませんが、他は残存しています。塔身は四面に月輪付金剛界四仏の種子(しゅじ)を刻み、各重の屋根下面は段により垂木を表現しています。現在は神社の境内に見られますが、元はここに所在したとされる旧仏性寺に伴う建造物と考えられています。	
		長田2693 南北朝 昭和31年(1956)6月28日		
有形文化財	建造物	町井家住宅 主屋・書院 まちいけじゅうたく しゅおく しょいん	町井家は江戸期の大庄屋であり、住宅は主屋と書院からなっています。建築年代は主屋は18世紀後半、書院は19世紀代に下ると考えられます。主屋は桁行15.2m、梁行13.2mを測り、入母屋造棧瓦葺一重の建物で、前面に本瓦葺の庇が付いています。平面は東側が土間で、上部は二重梁式の和小屋で、小屋束、貫を細かく組み合わせ、高い棟を支えています。西側には畳間が並び、上手中央には仏壇が据えられています。書院は主屋の西南隅につながり、桁行9.0m・梁行5.0mの規模で、主屋に比べると繊麗な感じで入母屋破風が巧みに組み合わせられています。	
		栢川 江戸 昭和50年(1975)6月23日		
有形文化財	建造物	俳聖殿 附 厨子1基 棟札1枚 門1棟 はいせいでん つけたりずしき むなふだ1まい もん1とう	地元出身の政治家川崎克が、芭蕉生誕300年を顕彰して昭和17年(1942)に建てたもので、建築家伊東忠太の助言を得て、島田仙之助が設計しました。木造二階建、檜皮葺、八角重層塔建式の聖堂で、屋根の形は旅笠、八角形の大扉は着物、その中間は顔、周囲の円柱は行脚する芭蕉の脚と杖を表現しています。下層は平面八角円堂で、外周に吹放しの孫庇を設けています。床は石敷で、身舎には八角厨子を据え陶製芭蕉座像を安置しています。上層は円形平面ですが、小屋組が露出し、下層からは梯子でのみ出入りが可能です。柱や繫梁、二重の扇垂木、組物の肘木など主要な部材には丸太を使用し、屋根は勾配や軒出を順次変化させるなど、堂宮建築を基礎にしながら、数奇屋風の意匠を採り入れた造形物です。	
		上野丸之内117-4 昭和 平成22年(2010)12月24日		

有形文化財	絵画	絹本着色藤堂高虎像	軸仕立、縦103cm、横60.6cmを測り、中央下に衣冠束帯の端座した像を描きます。白髪に黒の冠をつけ、纓は長く垂れています。顔は白髯老顔、衣は黒、右手に笏を持ち、左側に太刀が添えられています。背景は金彩で麻葉つなぎに赤色丸に五枚鴛文を描く幕を絞り、その間に山水を描いています。絵の上部に「権大僧正高山(中略)三國伝燈大僧正天海」の賛辞があり、装裏に「奉表補高山道賢之像俗名藤堂和泉守高虎公 時寛文十一年(1671)(中略)醫王山西蓮寺常住 真雅修之」と墨書があります。寺伝によれば絵は藤堂藩画師曾谷宗淨の筆で、真雅は西蓮寺の十六世とされています。江戸期の作で、高虎の晩年の様子を描いたものです。	
		けんぼんちやくしよくとうどうたかたからぞう 長田1931 江戸 明治39年(1906)4月14日		
有形文化財	絵画	絹本着色興正菩薩像	縦119.1cm、横63.6cm。大和国西大寺中興の祖観尊(1201~1290)の頂相です。観尊は鎌倉期の高僧で、勅諭号を賜り、興正菩薩と称せられています。本図は他に伝来する数種の観尊の肖像に共通し、面貌は眉間低平、頬骨が張り、鼻頭が突隆した精悍な面構えで、温顔のうちに威厳を具えた彼の風貌を良く伝えています。また、図讀がなく、像前には律宗特有の法具である戒尺、三包み、柄香炉を載せる説相机を配置しているところから、講説の席に奉懸したものと考えられます。左上の「興正菩薩」の文字は、後に書かれたものです。なお、軸箱には「興正菩薩影像、明兆筆、西大寺」とあり、もと西大寺の所有物であったと考えられます。	no photo
		けんぼんちやくしよくこうせいぼさつぞう 富永1238 鎌倉 明治45年(1912)2月8日		
有形文化財	彫刻	木造十一面観音立像	像高177cm。平安初期の作と考えられますが、前代の古い様相を残す仏像です。頭部には天冠台を着け、面部は豊顔木眼で、白毫(びやくこう)は持たず、極めて神秘的な面相をしています。手は三対あり、第一対左手は臂を曲げて蓮花を持ち、同右手も同じく臂を曲げて施無畏の印を結んでいます。第二対左手は下に伸び、水瓶を持ち、同右手も同様に下に伸びて念珠を持っています。また、第三対左手は外方に臂を曲げて三叉戟を取り、同右手も同様に外方に臂を曲げて金剛杵を持っています。体軀は豊かで、姿は端麗荘厳です。本像は十一面観音立像としては珍しく六臂であるうえに、裳が二段に折れ返り、その上に二段に天衣を付けている点や両足首にも飾りを付けている点など、他にあまり類例を見ません。	
		もくぞうじゅういちめんかんのりゅうぞう 島ヶ原1349 平安 明治37年(1904)8月29日		
有形文化財	彫刻	木造俊乗上人坐像	像高82cm。鎌倉初期肖像彫刻の傑作です。俊乗坊重源は、奈良東大寺再興のため全国を行脚勧進し、遂にこの大事業を成し遂げた名僧で、新大仏寺も建仁2年(1202)ころ、東大寺の伊賀北部の荘園の中心地であるこの地に彼が創建したものです。像容は僧頭老瘦の温容で、眼は玉眼。体は黄灰青色の僧衣の上に、淡赤色の袈裟を着し、両手は身前に合わせて印を結び、足は結跏趺坐(けっかふざ)しています。唇を真一文字に結び、喉仏の前に突き出る表情等、像の姿に意志の強固さが如実に表現されています。昭和12年(1937)の修理の際、頭中に素彫の小仏像数体、数個の数珠顆、小石等が納入されているのが見つかっています。	
		もくぞうしゅうじょうしやうにんざぞう 富永1238 鎌倉 明治45年(1912)2月8日		

有形文化財	彫刻	木造僧形坐像	像高75cm、坐幅65cm、鎌倉期の寄木造の彩色像です。僧頭、老体瘦顔で、眼は木眼、僧衣に袈裟を着し、結跏趺坐しています。右手は臂を曲げ掌を上にして膝の上に置き、左手は同じく掌を上にして四指を曲げています。両手とも持物があつたと思われませんが、現在は紛失しています。全体に彩色されていたようですが、今は顔、胸、両手が黒色で、他は木素地です。	
		もくぞうそうぎようざぞう 富永1238 鎌倉 大正2年(1913)4月14日		
有形文化財	彫刻	木造虚空蔵菩薩坐像	像高95.5cm、檜材の寄木造ですが、頭部と胴部は一木で造っています。頭部、宝髻(ほうげい)天冠台は彫出し、面部は豊顔彫眼です。左手は臂を曲げて宝珠を捧げ、右手は臂を曲げ前掌して印を結んでいます。条帛を懸け、腰部に裳を着け、右足を上にして結跏趺坐しています。頭部、胸部に後で補修した天冠、胸綴が着き、台座、光背は後補のものです。衣文鋭く衣のしわも流麗であり、平安後期でも比較的古い時期の作とされます。江戸期の書物である『三國地志』や『伊水温故』には、この像は空海作と記されています。	
		もくぞうこうぞうぼさつざぞう 山出1658 平安 大正4年(1915)3月26日		
有形文化財	彫刻	木造阿弥陀如来坐像	像高137.9cm、寄木造。頭部は螺髪を表し、白毫は木製嵌入。面部は豊顔木眼、両手は臂で曲げ、膝の上で弥陀の印を結んでいます。漆箔は全面に残っていたようですが、現在は一部残存しています。全体的な印象から、平安後期の作とされます。台座と光背はともに後補のもので、「天文拾五年(1546)口造之 住持口賀大工橋安経長田佛性寺口」という修理銘が発見されています。また、『伊水温故』(いすいうんご)では、四天王像とともに市場山長福寺にあると記されていますが、その名をとって市場寺の寺名が付けられたとする説もあります。	
		もくぞうあみだによらいざぞう 菖蒲池1471 平安 大正4年(1915)8月10日		
有形文化財	彫刻	木造四天王立像	本尊の阿弥陀如来坐像を守護して四方に立つ像です。広目天、増長天、多聞天、持国天の四軀で、像高は邪鬼とともに165cm前後を測ります。一木造、ともに身に甲冑を着け、纏衣(まとい)は両肩から懸かって下腹部をまわっています。両肘に美襟を付けて後方に翻っています。足には靴を履き二足の邪鬼を踏んでいます。広目天は右手を屈臂し戒器をもち、増長天は右手に宝剣を振りかざし、多聞天は右手に宝戟(ほうげき)をとり、左手で宝塔を捧ぎ持ちます。また、持国天は右手を中央前方に伸ばし、宝剣を左に向けて持ちます。四天王立像の一部には、今も美しい截金(きりかね)模様や彩色が残っています。	
		もくぞうしてんのうりゆうぞう 菖蒲池1471 平安 大正4年(1915)8月10日		


有形文化財	彫刻	木造阿弥陀如来坐像	像高87.9cm、寄木造。頭部は螺髪を表し、肉髻珠と白毫は水晶が入れられています。面部は豊顔木眼。袈裟は左肩から右肩に懸けています。両手は臂を曲げ、前面で定印を結び、右足を上にして結跏趺坐しています。全体的に黒色を呈しますが、漆箔が残存していたことも考えられます。台座、光背は後補のものと思われる。形がよく整って定朝様式を伝えています。顔や姿に写実的な表現が見られ、鎌倉初期の作とされています。	
		もくぞうあみだによらいざぞう 東谷1255 鎌倉 大正4年(1915)8月10日		
有形文化財	彫刻	木造薬師如来坐像	像高100cm、寄木造。頭部は螺髪を表し、面部は豊顔木眼、肉髻珠と白毫は水晶が入れられています。左手は臂を曲げて、膝上で薬壺(やくこ)を持ち。右手は臂を曲げ、掌を前に向けています。袈裟は左肩から懸かり、右肩にも少しかかります。腰部には裙を纏い、左足を上にして結跏趺坐しています。台座、光背は後補のものです。衣文の彫りが浅く、線は流麗でよく定朝様式を伝え、平安後期の作とされます。長隆寺は行基開基の七堂伽藍ありと伝えられますが、焼失し、今の境内は往古の桜本坊跡と伝えられます。	
		もくぞうやくしによらいざぞう 森寺93 平安 大正4年(1915)8月10日		
有形文化財	彫刻	木造五大明王像	いずれも檜材の一木造の彩色像です。不動明王坐像は像高177.2cm、降三世(ごうさんぜ)明王立像は179cm、軍荼利(ぐんだり)夜叉明王立像は174cm、金剛夜叉明王立像178cm、大威徳(だいいとく)明王倚像150cmを測ります。五大明王は不動明王を中心に東西南北を守護し、仏敵を威圧する諸尊であるため、手に武器を持ち、怒りの表情を表しています。金剛夜叉明王の裳には美しい円花文が鮮やかに残っています。平安後期の作とされますが、軍荼利夜叉明王立像の岩座には、慶應元年(1865)の修理銘があります。	no photo
		もくぞうごだいみょうおうぞう 平安 大正4年(1915)8月10日		
有形文化財	彫刻	木造日光月光菩薩立像	ともに像高103cm、檜材で寄木造。頭には宝髻があり、天冠台を付けています。面部は豊顔木眼、白毫は水晶を入れています。袈裟は左肩から懸かり腰部以下には裙をつけています。纏衣は両肩からかかり、両肘から下に垂らしています。台座は八重座で上部に二片切付蓮花座、次に反花以下各座を全て唐様で漆箔を施しています。光背は舟形で雲烟(うんえん)を彫刻し、中央に八葉をおきます。日光像は左手を曲げ、右手を伸ばして長柄の赤色宝鏡を持ち、月光像は逆に右手を曲げ、左手を伸ばして白色宝鏡を持ちます。元は彩色が見られましたが、現在は素地が表れ、木目が見られます。平安後期の作とされます。	
		もくぞうにっこうがっこうぼさつりゅうぞう 湯屋谷1001 平安 大正4年(1915)8月10日		


有形文化財	彫刻	木造阿弥陀如来及両脇侍像	中尊は像高132.1cmで檜材の寄木造。頭部は螺髪を表し、白毫は水晶を入れ、豊顔木眼で、両手は来迎印を結ぶ。袈裟は左肩よりかかり、腰部に裙を纏っています。右足を上にして結跏趺坐しています。胎内に「傳燈大法師像實海……右件佛承安二年(1172)十月廿九日……」の墨書銘があります。左脇侍は像高168.7cm、右脇侍は171.5cmで、日光月光菩薩と称されてきました。本尊と近い作風を示し、材質はもとより、表面の麻布等まで3軀とも共通しています。	
		もくぞうあみだによらいおよびりょうわきじぞう		
有形文化財	彫刻	木造観世音菩薩坐像・勢至菩薩坐像	ともに像高68.2cm、檜材で寄木造。頭部は宝髻で天冠台がつきます。豊顔木眼で、白毫は水晶が入れられています。袈裟は左肩から懸かり、腰部には裙を纏い、両足は跪坐しています。両者とも当初と思われる漆箔を残しています。観世音菩薩は両手を腹部にあて蓮華を捧げ、勢至菩薩は胸にあて合掌し、いずれも顔や姿に往生者を迎える慈悲に満ちた様子をよく表わしています。平安後期か鎌倉初期の作と考えられ、台座には貞享四年(1687)の修理銘があります。また、『伊水温故』には、「二尊ともに行基の作 是は舊佛性寺の本佛阿弥陀の脇士也 天正の乱に混乱」と記されています。	
		もくぞうかんぜおんぼさつざぞう・せいしほさつざぞう		
有形文化財	彫刻	木造十一面観音立像	像高165cmを測る、平安期の一木造の観音立像で、材質は榿(かや)です。頭部に十一面の小仏を頂き、その下部に天冠台を付しています。豊顔木眼、右手は下に伸ばし、左手は手前に曲げ、蓮花を挿した水瓶を持っています。左の肩から斜めに袈裟をかけ、腰部に裙を纏っています。天衣は両肩から垂れ下がりが、膝の上下で二段に懸かっていますが、裙上方は通常とは異なり、結び目があるのが特徴的です。眉目、口元に墨彩、唇に朱がわずかに見られます。本像は元は大村神社の別当禅定寺の本尊であったと伝えられ、明治3年(1870)同寺が廃されるに際し、同じ真言律宗の宝蔵寺に移されたものです。	
		もくぞうじゅういちめんかんのりゅうぞう		
有形文化財	彫刻	木造地藏菩薩坐像	像高68cm。檜材寄木造、玉眼、袈裟部には彩色が残っています。やや切れ上がった眼尻、への字に結んだ唇、豊頬ながら良く引き締まった肉取りの面貌は、鎌倉期の作風を伝えるものです。腹部内面に「貞治三年(1364)甲辰三月十五日、寛慶法橋之作、子息忍慶助作」の墨書銘があることから、仏師としての寛慶と忍慶の親子関係がわかる上に、その制作年代がわかる貴重な資料です。また、胎内には舍利、紙本墨書仏眼真言、写経断片、袈裟雛形、毛髪及び錦袋、版本両部種子曼陀羅、摺仏(すりぼとけ)など大量の納入物が納められていました。	
		もくぞうじぞうぼさつざぞう		


有形文化財	彫刻	木造阿弥陀如来坐像	像高131.8cm、寄木造。頭部は螺髪を表し、肉髻珠と白毫は水晶が入れられています。豊顔木眼で、袈裟は左肩より懸かり、右肩にも少し懸かります。下部に裳を纏い、袈裟の端は両脚前に垂れています。右手は前にあげ、左手は膝上のせ、来迎印を結んでいます。両脚は右足を上にして結跏趺坐しています。元は漆箔であったらしく、部分的に残存箇所が見られます。台座、光背は後のものです。少し撫で肩であります。螺髪は粒もあらく、胸腹の肉付もよく、しまりのある顔には力強さも見られます。平安後期の作とされます。『伊水温故』は当寺の本尊を「阿弥陀ノ立像」としているため、本像は元禄9年(1696)の災禍以降に、当寺にもたらされたものと考えられます。	
		もくぞうあみだによらいざぞう		
		上野寺町1152 平安 昭和12年(1937)8月25日		
有形文化財	彫刻	木造薬師如来坐像	像高88cm、檜材の一木造。彫眼して、螺髪を彫出し、白毫を嵌入しています。衲衣(のうえ)は左肩より右肩を蔽(おお)っています。右手は臂を曲げて掌を前にして、第二、三、四指を軽く曲げ、左手は膝上に乗せ、薬壺を持って、結跏趺坐しています。台座、光背は既に紛失していて、後世に顔面を削った後が残っています。平安中期の作で、本堂の厨子に安置され、これまで秘仏として、33年ごとに開帳されるのみでした。	
		もくぞうやくしによらいざぞう		
		猪田2159 平安 昭和24年(1949)2月18日		
有形文化財	彫刻	木造如来坐像 附石造基壇	像高293.0cm。頭部は一材から彫成し、頸部の下端を体部に差し込み製作しています。切れ長で抑揚のある両眼、厚目ながら形良くまとめられた唇など、大作にふさわしい悠揚とした落ちつきを示す表情をしています。内割り部等に「大和尚南無阿弥陀仏」「大仏師安阿口」等多数の結縁(けちえん)者の交名(きょうみょう)の墨書がみられますが、大仏師は快慶であり、銘記の体裁から、重源・快慶の一連の造像とみられます。運慶とならぶ鎌倉初頭の有名な仏師快慶が、俊乗坊俊乗坊重源の下で作った丈六仏で、重源開創、伊賀別所の丈六弥陀三尊像の中尊に相当するものと思われます。体部は江戸期の補作ですが、頭部は当時のまま残存していて、制作年代は建仁3年(1203)ころと考えられます。砂岩製の石造基壇は、高さ106.5cm、直径480.0cm程の大きさで、平面円形で厚さ約20cmを測ります。	
		もくぞうによらいざぞう つけたりせきぞうきだん		
		富永1238 鎌倉 昭和50年(1975)6月12日		
有形文化財	彫刻	木造薬師如来坐像	像高59.9cm、左手は掌を上にして膝上で曲げ、薬壺を載せ、右手を前に出し、右足を上にして結跏趺坐しています。檜の一木造であり、内割りは施されていません。頭部は大きく、胸をそらせた体躯に厚みがあり、しかも膝の奥行も深く、全体に穏やかで安定した趣を示しています。制作時期は10世紀半ばを降らないと思われませんが、眉や目を表す優美な曲線をはじめ、柔らかな肉どり、薄い質感をとらえた着衣の表現は、平安後期の和様にも通じるものです。	
		もくぞうやくしによらいざぞう		
		三田1547 平安 平成3年(1991)6月21日		

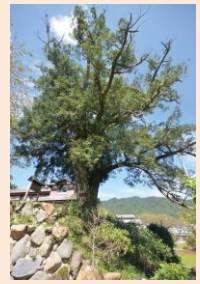
有形文化財	<p>書跡典籍古文書</p> <p>紙本墨書大般若經 附唐櫃六合</p> <p>しほんほくしょだいはんにやきょう つけたりからひつろくごう</p> <p>種生1269 奈良～江戸 昭和37年(1962)2月2日</p>	<p>大般若経全600巻のうち46、80、280、287、417の5巻を欠いていますが、595巻が残存しています。紙本墨書、黄褐色の檜(こうぞ)紙、1枚の長さ49.7cm～56.7cm、幅24.7cmです。初めは卷子本でしたが、今は折帳に改装されています。書写年代は天平期に始まり平安・鎌倉・江戸期にわたっていますが、平安期のものが中心を占めます。第91巻には「天平宝字二年(758)歳次戊戌十一月奉為伊勢大神願主沙弥道行書写優婆塞円智」の奥書があり、奈良期の山岳修行の在り方と雷神・風神及び伊勢大神信仰を伝えた史料として注目されます。経典を納めた経櫃は檜櫃製唐櫃六合で、身縦34.5cm、身横45.0cm、身深49.0cmの黒漆塗覆蓋四脚付であり「貞和三(1347)俱尸羅(くじら郷)」の墨書銘があります。</p>	
有形文化財	<p>書跡典籍古文書</p> <p>更科紀行 芭蕉自筆稿本</p> <p>さらしなきこう ばしょうじひつこうほん</p> <p>上野丸之内117-13 江戸 昭和52年(1977)6月11日</p>	<p>松尾芭蕉が貞享5年(1688)、「笈の小文」の旅を終えて江戸への帰途の際に、信濃更科の名岳を仰ぎ、善光寺に詣でた折の紀行文と発句を綴った芭蕉翁自筆の草稿です。芭蕉紀行文では現存する唯一の草稿本で、更科紀行文の推敲過程を明らかにする貴重なものです。縦20.1cm、全長228cmを測り、元は懐紙5枚に書き継がれたもので、料紙は薄美濃紙を用いています。本文は「さらしな里、おはすて山の月見の事」云々以下82行を存し、末に「はせを」の自署がありますが、文中には訂正の跡が著しく、所掲の句も抹消加筆があり、草稿本であることがわかります。本文末には芭蕉の高弟尚白の筆による識語があり、本巻が芭蕉の真跡であることを記しています。</p>	
有形文化財	<p>考古資料</p> <p>板彫五輪塔</p> <p>いたほりごりんとう</p> <p>富永1238 鎌倉 昭和45年(1970)2月8日</p>	<p>樺板を五輪塔の形に割りぬき、表面に印仏1,036体を一面に彫り、各輪の小円内に梵字を表わしたものです。高さ58.8cm、厚さ1.3cmを測り、裏面には、「當得成佛者有人作印佛印塔功德建仁三年(1203)九月十五日造口造東大寺大勸進大和尚口口」とあり、重源がこれを寄附したことがわかります。彼が諸寺に寄附した物には独創的なものが多くみられますが、本品もその一例として挙げられます。</p>	
無形民俗文化財	<p>上野天神祭のダンジリ行事</p> <p>うえのてんじんまつりのダンジリぎょうじ</p> <p>江戸～</p> <p>平成14年(2002)2月12日</p>	<p>上野天神宮の秋祭りとして行われ、毎年10月の23・24・25日に行われます。万治3年(1660)に再興を見たとの記録があり、それ以前から何らかの祭礼があったことを窺わせます。23日は宵山で、各町では印・楼車(ダンジリ)を引き出して飾り付けを行い、24日は足揃えの儀が行われ、楼車がそれぞれの町内等を巡行し、鬼行列も相生町から三之町筋を練り歩きます。25日は本祭りで御輿の渡御に続いて鬼行列、9基の印・楼車が供奉します。この行事は、御輿の渡御を中心とする祭りに仮装の行列(練物)や作り物が加わり、現在のような鬼行列や印、楼車で賑わう形態を整えるようになったものです。印は神の依代と考えられるもので、それを囃す楼車と鬼行列と呼ばれる仮装行列が続く、類例の少ない貴重な行事です。</p>	
記念物	<p>名勝及史跡</p> <p>城之越遺跡</p> <p>じよのこしいせき</p> <p>比土4724 古墳 平成5年(1993)10月29日</p>	<p>木津川上流域の丘陵付近の平地に広がる古墳前期を盛期とする遺跡です。平成3年度(1991)の発掘調査により、3箇所の井泉と溝法面に石貼りを施し、溝合流点には立石や階段状遺構を配した大溝が検出されました。大溝からは祭祀に使われた土器や木製品が多量に出土しました。土器は土師器の小型壺と高杯が大半を占め、壺の中には下部に孔を穿ったものも見られます。また、木器は剣形や案(つくえ)といった祭儀用のものが含まれますが、木器の中で一般的に多く出土する農耕具は見られません。こういった出土遺物の内容からも、溝周辺において祭祀が執り行われ、その道具が溝に廃棄されたものと考えられます。一方、溝の石貼りや立石は、後の庭園につながる造形美と技術を示すとされています。</p>	


記念物	史跡	御墓山古墳	上野盆地北東部、柘植川左岸の南宮山頂から北東に延びる丘陵端部に、前方部を北東に向けて立地している前方後円墳です。全長188m、後円部径110m、高さ14m、前方部幅80m、高さ10mの規模を有する三重県最大の古墳で、墳丘は二段に築成されていますが、北側の前方部からは三段のような形状をしています。後円部頂の平坦面にはくぼんだ箇所が見られ、盗掘跡を完全に埋め戻さず放置した痕跡と考えられます。また、後円部の北西側には造り出しと呼ばれる平坦面があり、その部分において重要な埴輪を使った祭祀儀礼が行われていたとされます。墳丘の側面には葺石が見られ、円筒埴輪・家形埴輪・蓋形埴輪の破片が採取されています。5世紀前半の築造と考えられます。	
		みはかやまこふん 佐那具町古墳 大正10年(1921)3月3日		
記念物	史跡	長楽山廃寺跡	上野市街地の南東、上野城跡より続く低丘陵上に伊賀国分寺跡と東西に並んで立地しています。奈良期に聖武天皇の勅願により全国に建立された国分二寺のうち、伊賀国分尼寺の跡であり、周囲には築地状の土塁がわずかに残存しています。中門跡、金堂跡といった建物の痕跡も、基壇状の高まりとしてわずかに残されています。	
		ちょうらくさんはいじあと 西明寺2756の15ほか 奈良 大正12年(1923)3月7日		
記念物	史跡	旧崇広堂	崇広堂は津藩の藩校である有造館の支校として、文政4年(1821)に藤堂家十代藩主高允(たかさわ)により上野城内の一角に建てられました。崇広堂の名は中国の書物『書経』の一文からとったものですが、講堂に架かる扁額の文字は、米沢藩主上杉治憲の筆によるものです。崇広堂の東側は講堂を中心とした文場として用いられ、西側は武技場や馬場を有する武場として用いられていましたが、藩校に通有の孔子廟が、崇広堂にはなかったことに特徴があります。嘉永7年(1854)の大震災で崇広堂も大きな被害を受けましたが、文場を中心にいち早く復興し、講堂、講師控室、有恒寮、門、塀等は今も当時の藩校の様子を伝えています。なお、武場はいち早く学校用地として用いられ、現在は崇広中学校敷地となっていますが、文場は市立図書館として長く用いられた後に、保存整備事業が実施され一般公開されています。	
		きゅうすうこうどう 上野丸之内78-1 江戸 昭和5年(1930)11月19日		
記念物	史跡	廃補陀落寺町石	奈良街道と呼ばれる旧街道から、廃補陀落寺跡に向かう石標として1町ごとに配置されたものです。基石から十五町石まであったようですが、現在11基が残存し、9基が史跡に、2基が市指定文化財となっています。いずれも自然石を用い、上部に梵字アクまたはアンを薬研彫りし、その真下に丁数、その両脇に願主、記年銘を刻んでいます。基石と四丁石に建長5年(1253)の銘があり、全国的に見ても古い資料の1つです。廃補陀落寺跡には礎石が残り、蔵骨器や布目瓦が出土していて、町石と同じく鎌倉期に建立されたものと考えられます。	
		はいふだらくじちようせき 西高倉292ほか 鎌倉 昭和8年(1875)2月28日		
記念物	史跡	伊賀国分寺跡	上野市街地の南東、上野城跡より続く低丘陵上に伊賀国分寺跡は立地しています。奈良期に聖武天皇の勅願により全国に建立された国分二寺のうち、伊賀国分僧寺の跡であり、東西220m・南北240mを測る築地状の土塁によって四周を囲まれた寺域のやや西よりに、中門跡、金堂跡、講堂跡と考えられる基壇の高まりが残存しています。また、寺域の南東には塔跡と想定される基壇状の高まりも見られます。こういった伽藍の配置は他国の国分寺跡にも一般的に見られるものであり、伊賀国分僧寺は七堂伽藍を備えた本格的な古代寺院であったことが窺い知れます。なお、西側の土塁跡の条里地割を介した北への延長線上には伊賀国庁跡が所在し、国分寺と国庁が計画的に造営されたと考えられます。	
		いがこくぶんじあと 西明寺2673ほか 奈良 昭和23年(1948)1月14日		

記念物	史跡	上野城跡	上野城は、現在のの上野市街地の北に位置する丘陵上に、筒井定次が天正13年(1585)に城郭を構えたことに始まり、当時の天守台は、丘陵最高所に位置する現在上水道の配水池がある位置に設けられていました。その後、慶長13年(1608)に定次に代わり、藤堂高虎が伊賀に入国しましたが、高虎は、筒井本丸を西側を拡張して高さ約30mの高石垣を築き、五層の天守を建てようとした。天守は完成直前の台風で崩壊して、昭和に入るまで再建されることはありませんでした。江戸期においては、元の筒井本丸跡に城代屋敷が建てられ、伊賀の治世は、専らこの屋敷で執り行われました。近年継続して実施されている屋敷地の発掘調査では、南側に表向きの施設を配し、北側に奥向きの施設を配した屋敷跡の構造が明らかになってきています。	
		うえのじょうあと 上野丸之内106 桃山～江戸 昭和42年(1967)12月27日		

記念物	史跡	伊賀国庁跡	伊賀市北部を西に流れる柘植川右岸の段丘上に立地する古代伊賀国の役所跡です。奈良期終わりから平安後期にかけて、大きく4期に分けられる遺構の変遷が見つかっています。東西・南北41m程度の掘立柱塙や溝で区画された政庁域に、主要施設である正殿・前殿・脇殿が配置されています。正殿などの主要建物は、当初は掘立柱建物でしたが、10世紀前半から後半にかけて礎石立建物に建て替えられた様子も明らかになっています。出土遺物の中には壘で「国厨」と書かれた土器も見られることや、遺跡の中心地に「こくつちよ(国町)」と称する地名が残ることも、検出された建物群が伊賀国庁を構成する中心建物群であることを示しています。また、国庁跡の南には東海道が南北に通り、南の丘陵上には国分二寺が立地し、国分寺、国庁が計画的に配されたと考えられます。	
		いがこくちょうあと 坂之下353-1ほか 奈良～平安 平成21年(2009)7月23日		

記念物	天然記念物	高倉神社のシブナシガヤ	高倉神社境内南側の竹藪の中に一本あり、樹高約20m、幹周242cmを測ります。生育は良好で、毎年多量の実を付けていますが、既に江戸時代には存在したことが『三国地志』などの書物により知られています。伊賀地域では江戸時代、最上の料理用油となるカヤ油を取るため、多くカヤを植えていたとされます。また、カヤ材は基盤としても重宝されていました。シブナシガヤは、種子の胚乳についている渋皮が薄く、外側の殻に渋皮がくっついている状態におけるカヤの変種で、たいへん希少な品種です。	
		たかくらじんじやのシブナシガヤ 西高倉1046 昭和7年(1932)7月25日		

記念物	天然記念物	果号寺のシブナシガヤ	寺の境内の北東隅に所在し、樹高約20m、地面から高さ50cmの幹周は370cmあります。高さ90cm付近で3つの幹に分かれ、その最大幹周は281cmになります。樹勢は旺盛で毎年多量の実が得られます。嘉永2年(1849)発行の『本草綱目啓蒙』には「シブ皮核二着イテ仁二着カズ、濃州多良及伊州上野ニモアリ伊賀方言しるがやト云フ」と記され、江戸期から「しるがや」として知られていたことがわかります。	
		かこうじのシブナシガヤ 西山1182 昭和7年(1932)7月25日		

記念物	特別天然記念物	オオサンショウウオ	オオサンショウウオは日本特産かつ世界最大の両生類で、全長が1m以上に成長するものも見られます。頭部は扁平で大きく、体は暗褐色で、不規則な黒色の斑紋があります。四肢は短く、前肢は4本指、後肢は5本指が普通です。その形態が約3千万年前の化石とほとんど変わっていないことから、「生きた化石」とも呼ばれています。伊賀市内では木津川・服部川上流域を中心に一部河合川流域に分布が見られ、山地や水田、集落の間を流れる河川の岩場や岸辺植生の間に生息しています。	
		地域を定めず 昭和27年(1952)3月29日		